

【寄稿特集 第一弾】 心に残る症例

「最後のピアノコンサート」 — 尊厳死を選択し自宅逝去された O さんの最期 —

クリニックふれあい早稲田 院長 大場敏明

パーキンソン病の故 O さん（享年 82 歳）。遠方の神経内科専門医で診療を受けていたが、通院困難となり、逝去 3 年前に当院へ転院、1 年前に訪問診療となった。O さんは逝去 4 年前専門医通院中に「尊厳死宣言公正証書」を提出、尊厳死を選択していた。

「尊厳死宣言公正証書」

逝去された年の初夏、誤嚥性肺炎で入院中の K 病院に提出された尊厳死宣言公正証書（以下、「宣言」）の一部を抜粋する。

『 1 私は、私の病気が不治で、かつ、死期が迫っている場合に備えて、私の家族並びに私の治療に携わっていただいている医師等の方々に、次の要望を宣言致します。・・・パーキンソン病を患い、様々な合併症にも罹患し、長く痛みや苦しみを経験してきました。私の疾病が治療の限界に達し、末期医療となり、現在の医学では治療が不可能で不治となり、死期が既に迫っていることが・・・診断された場合には、死期を延ばすためだけの延命措置は、一切をお断り致します。

2 ただし、この場合、この苦痛を和らげるための処置は最大限に実施していただきたい。・・・

3 私としては、いたずらな延命措置をとらないことが、人間としての尊厳を保った死に方であり、安らかな死への向かい方と信じています。したがって、右の症状の段階に達したと診断されたとき以後は、・・・皆様が、臨終に臨み、私の意思を最大限尊重して右の措置を忠実に果たして下さることを心から要望致します。・・・』

ピアノの前での訪問診療

O さんが歩行困難となり、在宅診療へ移行したのは 80 歳の頃で、1 年余続いた。

訪問すると、O さんはピアノのある居間のソファーに座って、穏やかな笑顔で我々を迎えてくれた。病状が悪化して隣室のベッドに臥するまでは、その居間でピアノの上の若い女性の写真を見ながら診察を受けていた。だが訪問診療の礼儀として、家の中の写

真などをすぐには詮索しない。それが最愛の一人娘さんであり、ピアノの主であることを知ったのは、少し経ってからである。

往診時の雑談は、自然とピアノの事に。Oさんが無類のクラシック好きで、暇さえあれば音楽を聴いていた。ピアノを置く部屋も決めて家を建てたほど「ピアノのある生活が夢」だった。娘さんは、ピアノが近くにあるので自然に習うようになり、その後K音大の付属校へ通わせたとのこと。「実は私の姉が、K音大の講師で」と私自身の話しにも及び、強い親近感を抱いた。

そして、クリニックで毎夏開いている「平和の集い」や「認知症家族の会」等での実姉のピアノ演奏に、何回かお誘いした。しかし体調が優れず、奥様だけが聴きに來られて、後日の往診時、実に残念そうにしていたOさんの姿が強く印象に残った。

肺炎治療で入院、延命治療を拒んで帰宅逝去された年の初夏。Oさんは、高齢者宿命の肺炎で倒れ1ヶ月半、入院治療を余儀なくされた。適切な治療により病状は小康となり、本人の強い希望で退院となる。長年、家族と共に住み慣れた、ピアノのある自宅での最後の生活を選択された。「宣言」どおり延命治療の胃瘻は拒まれ、苦痛対策で注射ルート確保にIVHポートが装着され、隔日点滴状態で帰宅された。その盛夏、訪問診療再開となったが、いままで穏やかな笑顔だったOさんは、苦悶に満ちたやせ細った姿で、私を迎えた。

9月の孫のピアノ発表会まで生きたいとのOさんの希望に、補液量を増やしたが、痰からみを増やし、耐えがたい呼吸苦をひきおこしてしまう。妻と相談して補液を終了したところ、苦痛はウソの様に消失し、酸素吸入も煩わしいと外した。結局、自然の生涯に回帰した。

その2日後が入浴予定日だった。血圧は50～80、酸素が80代～90少しで、入浴にはハイリスク、臨死状態だ。しかし奥様が「亡くなってからではなく、生きているうちにキレイにしてあげたい」と毅然と述べられ 挙行となった。主治医の私と看護師が付き添い、入浴スタッフの丁寧なサポートで、洗髪し髭もそった。実に気持ち良さそうに浴槽につかったOさんは輝いて見えた。

「自然な生涯を貫きたい」「大好きな音楽を聞きたい」と強く望まれている中で、自宅でのピアノコンサート開催の運びとなった。



※この画像はイメージです

最後のピアノコンサート

隣室のピアノからK音大講師のSさんが奏でる音が、ベッド上の瘦身のOさんを、温かく包んだ。「親しみのある、静かな曲がいいわね」と選んだショパンの“ノクターン”である。一人娘を音楽家にしたいと、妻が別居してまでも、K音大の付属に通わせた思い出などがよみがえる。鍵盤の音は、曇空で薄明りの8月の中、家族が往来してきた木の廊下を渡ってくる。私と付き添いの若い医師がたたずむ静寂な室内に響き、Oさんの頬が緩んだように見えた。

続いてドビュッシー“月の光”が演奏される。押し寄せる荒波や風雨に、必死に歯を食いしばって、家族と共に生きぬいてきた、闘病人生が走馬灯のように巡る。そして最後に、ベートーベンの“月光”が演奏された。厳粛なリズムが、淡々と流れる。帰宅したOさんが望んだ孫のピアノ発表会には間に合わなかったが、補液の終了で安楽になれたのだった。

足元から見守っていた娘婿の内科医は、「拍手していました」と感激して語ってくれた。

そして、帰国された娘さんにも見守られ、Oさんの80年余の激動の人生は、静かに幕を閉じたのである。